

呼畢爾罕  
即ち轉生  
兒

達賴一世

達賴三世  
と蒙古族  
の歸依

清朝と黃  
教

法位の名にて、世々呼畢爾罕(轉生)を以て化身し、其の死する時、自ら往生する所を知る。其の弟子其の指示する者を迎へて之を立て、常に輪回して止まらざるものとす。

達賴第一世は、名を敦根朱巴(ゲゾンチュウバ)と稱へ、西藏の先王贊普の後裔なり。世々王位を襲き來りしも、敦根朱巴は王位を捨て、出家し、宗喀巴に弟事して、深く喇嘛黃教を學び、遂に其の法を嗣ぎ衣鉢を傳ふ。是に於て國人推尊して、西藏の國王と爲す。即ち法王を以て西藏王を兼ねる事と爲れり。以來西藏國王の位は、子孫に傳へずして、法王の轉生兒に傳ふることゝ爲り、又弟巴(テイバ)なる者を置きて副王とし、國政を輔佐せしむ。

西曆一千五百十一年、明の武宗帝の時(正徳六年)、達賴第三世親ら青海及河套の地に到り、諸蒙古族を教化す。是より各部靡然として喇嘛黃教に歸依し、諸王の如きも亦達賴の弟子と爲り、黃教に改宗する者甚だ多し。斯の如くにして黃教は、蒙古各部に傳播し、達賴を以て活佛と爲す。

清朝に至り、世祖使を遣して達賴第五世を迎へ、之を西天大自在佛に封じ、天下の